



宇佐地区について

宇佐市は、大分県北部地域に位置し、周防灘にある豊前海に面している。地先には、広大な干潟が広がり、その干潟や浅場を利用した底びき網、刺網、採貝、定置、カゴ、ノリ養殖など営まれている。

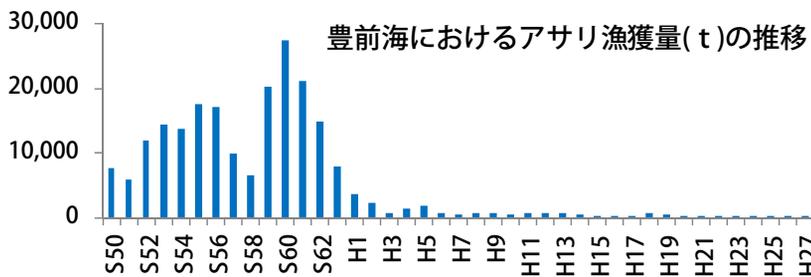
地区の干潟は、アサリやハマグリが生息し、漁業だけでなく、地域住民などの潮干がり場としても広く知られている。



干潟の現状

近年、豊前海を含む周防灘全体の干潟や浅場において、アサリやハマグリが資源が大きく減少し、地区の採貝漁業も低迷している。

アサリ資源の減少要因は、下表のように、様々な要因が考えられている。また、親貝不足で稚貝供給量が少ない現状においては、特に着底した稚貝の食害や強波浪による洗掘・流失死亡による減耗を低減させ、少しでも親貝を増やす対策が喫緊の課題となっている。



周防灘におけるアサリ資源の減少要因

- ・潮下帯漁場での乱獲による親貝不足→稚貝供給量減少
- ・餌料環境の変化
- ・高水温による死亡
- ・ナルトビエイによる食害、加えてクロダイによる食害も懸念
- ・強波浪による洗掘、流失による死亡
- ・大規模出水による被泥

組織の設立及び活動方針

減少したアサリ資源の再生を目的に、漁業者主体の「宇佐干潟保全の会」を平成 21 年度に結成し、県の普及指導員や市の林業水産課のサポートのもと活動を行っている。

活動は、現在、親貝不足に直面していることから、以下の方針に沿って取り組みを進めている。

- ①親貝不足を、他県産の母貝を移植することで補う。 ⇒ **母貝移植**
- ②移植した親貝や産卵によって着底した稚貝が食害や砂の移動で死滅しないように、被覆網を設置し、保護・育成する。 ⇒ **被覆網による保護**
- ③アサリ漁業がほとんど行われなくなり、干潟地盤が耕うんされず、硬化している。そこで、耕うん活動を行い貝類等が潜砂しやすい状態にする。また、この活動を通して被泥を低減させる。 ⇒ **耕うん活動**

活動の実践

(1) 耕うん活動

耕うん活動は、アサリの主要産卵期前の 9～10 月に実施している。

作業は、沖合の水深がやや深い場所では①噴流式の海底耕うん機を活用した大型耕うん。岸側のアサリ稚貝が良く見られる場所では②人が海に立ち入ってポンプ式で耕うんする。

なお、②の方法は、エンジンポンプの散水側から引いてきたホースに直径 40mm 程度の塩ビパイプを付け、塩ビパイプから噴出する水によって底質を攪拌する。

(2) 母貝移植と被覆網による保護・育成

活動場所は、アサリ稚貝の着底が見られる水深 DL+80cm 程度の石原（こぶし台の石が点在する場所）である。母貝移植や被覆網の設置時期は、耕うん活動後の 9～10 月である。

母貝移植は、有明産の殻長 25mm 前後のアサリを購入し、行う。毎年約 4.5 トン程度を移植する。

被覆網の設置は、母貝移植直後に行う。平成 30 年度は、幅 4m・長さ 50m・目合 9mm の被覆網（ラッセルネット）を 7 張設置した。網の固定は、長さ 50cm・直径 9mm の鉄杭を 50m 間隔で打ち込む方法で行った。



活動の効果と課題

アサリ生息密度は、被覆網区で 113～288 個/m² と高く、次いで耕うんのみ区が 25 個/m² で続いた。対策を行っていない対照区では本種の生息が認められないことから、活動の効果が特に被覆網区で高いと評価できた（平成 30 年 11 月調査結果）。また、被覆網下では自然に着底した稚貝の成長も確認されており、資源の回復が期待される。

ただし、干潟全体の資源再生には未だつながっていない。

豊前海におけるアサリ資源は、卓越年級群の発生によって急激に回復する可能性がある。この発生を促すためにも、今後も被覆網を活用した母貝の保護に努める必要がある。また、当該地区だけでなく、豊前海、ひいては周防灘全体の広域的な取り組みにすることが重要であり、そのネットワークづくりを検討する必要がある。

